

「明治の初めに木曾谷模型は何故つくられたのか」の一部訂正

資料館スタッフ 山口 登

2021年3月に発行した『研究紀要 第2号』の上記論文に、筆者の思い込みから大きな間違いがありましたので、お詫びをして訂正します。

この間違いをご指摘いただいた元長野営林局職員の和田重郎氏に感謝申し上げますとともに、直接的なご迷惑をおかけしました岩屋旅館様に深くお詫びを申し上げます次第です。

●訂正箇所 『研究紀要 第2号』43ページの4つ目の段落「……木曾出張所と嘉左衛門の関係は、……」の箇所について同じ段落内の8行分すべてを削除して次のように改める。

[ 木曾出張所と嘉左衛門の関係は、地元出身の所員(御雇)の中に山村代官家に仕えていた者もいたことが記録に残っているが、それよりも嘉左衛門が御嶽講の行者の中での長老格であったから、木曾の山林を管理する山林局木曾出張所とは、登山道や神社・石像等を設置する場所をめぐる、当然密接な関係が生まれていたことは想像される。そうした中で嘉左衛門とは顔なじみになって、四方山話の中で御嶽山、伐木運材、霊神像の彫刻のことなどが伏線となって、この木曾谷模型を作ろうという話に発展した可能性が考えられる。]

●補足説明……間違いの箇所は、明治13年の時点で岩屋旅館が本町の現在地に存在していたと著者が思い込んでいたことにある。嘉左衛門はもともと川西地区に住居があつて、明治の初めころに本町に小屋を建てて、町場への足場として使用し、百草丸やアメなどを商っていたらしいが、旅館にしたのは嘉左衛門の息子の代になってからではないかと和田重郎氏は推測している。いずれにしても、昭和2年の福島大火で一切合切が焼けてしまったために、現在の女将もはっきりしたことはわからないとのことである。

女将や和田さんと何度も昔の岩屋のことが話題になったけれども、江戸時代から岩屋は旅館をやっていたという筆者の思いこみで、論文に汚点をつけてしまった。これからは歴史を扱うにあたっては、念には念を入れて、慎重を期していきたいと深く反省する次第である。